PRESIDENT MOOK

若者も必見！ 日本一幸せな老後、入門

シニアライフ読本

「長生き人生」の心配ごと、全解決

新しい幸福論

探せばあった！ 老後の安心を約束する町

60歳のハローワーク&生涯学習のススメ

簡単！「エンディングノート」の書き方

介護はロボットが救う!? 大企業が続々参入……

PRESIDENT
www.president.co.jp

探せばあった！
老後の安心を約束する町

整形外科とリハビリを核に地域の医療・介護を統合する

千葉市

医療法人社団淳英会

人口五万人弱の千葉市緑区・おゆみ野地区。リハビリテーションに特化した医療法人社団淳英会は、二〇一四年春、総病床数一四九床の「おゆみの中央病院」を開設する。同法人が掲げる「統合ヘルスケアネットワーク（IHN）」の構築が、今、地域における医療と介護の連携に一つの明確な答えを出そうとしている

文　平尾俊郎　写真　大越邦夫

「おゆみの中央病院」が二〇一四年春開業

千葉市の東南部に位置する緑区は、その名のとおり緑が多く自然環境に恵まれた地区である。外房線の鎌取駅を扇の要とする「おゆみ野地区」はその象徴的存在である。おゆみ野地区には現在、緑区全住民の四割近い四万八〇〇〇人が暮らしている。

今、この地区の住民の熱い視線を集めているのが、南部の小高い丘に建設中の新病院だ。来春オープン予定の病院の名は「おゆみの中央病院」。総病床数一四九床というから決して大病院とはいえないが、人口に比してベッド数が足りないこの地域にとっては朗報となった。

新病院を運営する医療法人社団淳英会・増田貴之統括事務長は、地区住民の悩みをこう代弁する。

「公的病院はあるけれど、緑区には民間立の病院が非常に少ない。おゆみ野地区に関しては一つもありません。急病や事故で入院が必要な場合、遠くの病院に頼らざるを得ないのが実情です」

新病院の建設はおゆみ野地区住民が久しく熱望していたものであった。一〇年前から構想を持ち行政に粘り強く働きかけてきた淳英会の思いも同じだった。

二〇一四年三月に開業するおゆみの中央病院の診療科目は、外科、整形外科、内科、脳神経外科、リハビリテーション科の五科。総病床数は一四九床で、内訳は内科・整形外科を中心にした病棟が九九床、回復期リハビリテーション病棟が五〇床。

ここまで書けばわかるように、新病院はいわゆる総合病院ではない。医療と介護の境界域にあるサブアキュート～ポストアキュートに特化し、超高齢化社会の進展により、さらに重要性を増す回復期

Hospital profile

医療法人社団淳英会
おゆみの診療所
介護老人保健施設おゆみの

同じ敷地内に併設されたおゆみの診療所と介護老人保健施設おゆみの。ここではすでに医療と介護の垣根はなく、患者・スタッフは当たり前のように行き来している。

リハビリテーションを視野に入れた新しいタイプの病院なのである。

医療法人社団淳英会の歴史は、一九九六（平成八）年四月、鎌取駅前に開業した「おゆみの整形外科クリニック（当時はおゆみの整形外科）」に始まる。当時はまだリハビリテーションに対する関心は薄く、セラピストを配置する整形外科は数えるほどだった。それ以前に、理学療法士（ＰＴ）という専門職の絶対数が少なかった。そんな状況の中、同クリニックでは開業時よりＰＴを積極的に採用した。淳英会の創始者（前理事長）でもある本田英義院長は言う。

「患者さんはもちろん、私たち医師にとってもより満足できる医療を提供するためには、医師の分身ともいうべきＰＴの存在は不可欠です。整形とリハビリを必ずセットで提供することは当法人の医療行為における基本理念であり、すべてはここから始まった」

同クリニックはリハビリを含め一日平均三〇〇人に及ぶ通院患者に対応するため、現在では、一一人のＰＴを擁している。

3階に整形外科病棟(49床)、4階に内科病棟(50床)、5階に回復期リハビリテーション病棟(50床)を擁する。

県下最大級のリハビリテーションルーム

クラス100のバイオクリーンルームを備える。

千葉市内唯一の強化型在宅療養支援診療所

淳英会は法人の発足以来、一貫して医療と介護の連携を模索し続けてきたが、二〇〇三年には「介護老人保健施設おゆみの」（施設入所一〇〇名、通所リハビリテーション四〇名）を開設し、介護保険事業参入を果たした。

老健おゆみのの最大の特色は、際立った在宅復帰率の高さである。ここでは在宅復帰と継続的な在宅生活支援という老健本来の機能を果たすべく、職員一丸となってリハビリを強化、一年三六五日切れ目のないリハビリを提供している。結果、在宅復帰率は安定的に五〇％を超え、一三年六月には六三・四六％を記録した（直近半年の平均値）。

その一カ月後には、老健に隣接して有床診療所（一九床）の「おゆみの診療所」を開業。淳英会グループの中核をなす同診療所は、地域の一次診療を担っている。おゆみの診療所ではＰＴ／ＯＴ／ＳＴ合わせて二三人のリハビリスタッフを抱え、病棟では三六五日リハを実践している。またここ数年は「短時間通所リハ」を利用する人が急増している。

おゆみの診療所はまた、千葉市では唯一「強化型在宅療養支援診療所（単独型）」に指定されている。二四時間三六五日の訪問診療を実施しており、訪問患者は個人宅と施設を合わせ、約三五〇人にのぼる。その後も、一一年には「おゆみの居宅介護支援事業所」を、一二年には鎌取駅前のショッピングセンター内に、地域包括支援センターにあたる「千葉市あんしんケ

患者さんには医療も介護もない 健康体に戻すサービスがすべて

山下剛司理事長（43歳）。
医学博士。専門は整形外科。「IHNが目指すものは医療と介護の連携（アライアンス）ではなく、統合（インテグレーション）です。おゆみ野という限定された狭いエリアだからこそ実現可能なコンセプトといえるでしょう」

アセンター鎌取」を開設した。

「統合ヘルスケアネットワーク」の構築

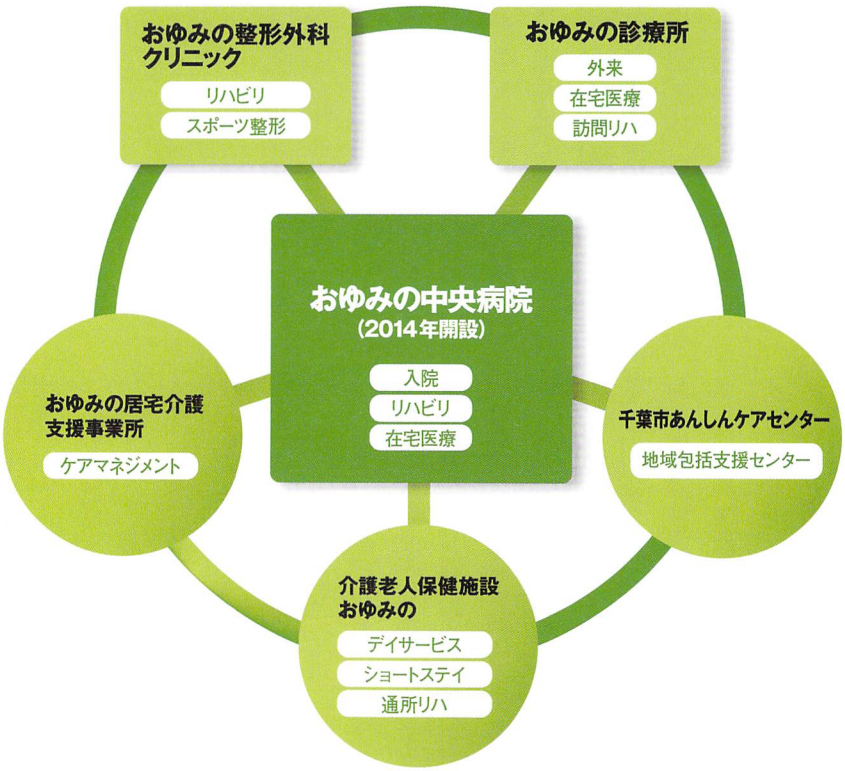
おゆみの中央病院新設の背景には、おゆみの診療所が手狭になり、もっと大きなハコ（施設）の必要があったことは想像に難くない。しかし、そうした物理的要因とは別に、グループ発足以来の〝戦略的構想〟の実現という大きな宿願があった。山下剛司理事長はそれを「統合ヘルスケアネットワーク（IHN＝Integrated Healthcare Network）」と表現する。

「昨今よくいわれる病診連携ですが、その実態は、別の組織が別の情報管理のもと、別の責任所在のもとで診ているものがほとんどです。こうした連携では患者さんは満足できません。それを実現するには、一人の患者さんの病態情報、治療方針、医師や専門職とのつながりなどが一本のラインで一体化され、一元的に統合されたうえで、最善の医療・介護サービスとなって提供されねばなりません。IHNの構築とはそういう仕組みをつくることにほかなりません」

前述のように、淳英会はすでに医療・介護を網羅したネットワークを有している。しかし、核となるおゆみの診療所が病院未満の一九床では、地区のニーズに十分に応えることはできなかった。一四九床の新病院の開設によって、山下理事長が構想するIHNが真の意味でスタートすると考えていいだろう。

「医療（介護従事者）にとって医療と介護は制度的にも大きな違いがありますが、患者さんにとってはどちらでもいい。医療だろうと介護だろうと、自分の健康を取り

IHN（統合ヘルスケアネットワーク）の構築



戻してくれるサービスがベストなわけです。患者や医療資源が縦断的に行き来するＩＨＮというネットワークが完結しそれが有効に機能すれば、患者さんのニーズを最短距離で実現できると思います」

ＩＨＮは厚生労働省が推進する「地域包括ケアシステム」と重なる部分もあるが、高齢者や介護領域に限定されず、若い世代も対象としたネットワークであるところに違いがある。山下理事長は続ける。

「おゆみ野地区は高齢者比率が一〇％に満たない県内でも有数の若い町です。子どもからお年寄りまで全世代の役に立つ、健康づくりに限らず地域社会の健全な発展に貢献できるネットワークという概念でとらえています」

そうした言葉を裏付けるのが、淳英会がごく日常的に実施しているボランティア活動だ。リハビリスタッフを中心とした職員は、社会貢献の一環として地域の小学校・中学校を訪問し、体力向上やケガ予防に関する講習を実施している。また、地域の老人会に出かけては、健康体操や感染予防などのレクチャーを無償で行っている。

おゆみの整形外科クリニック
本田英義院長

プロアスリートにも対応 スポーツリハの拠点に

新病院を待ち望んでいるのは、おゆみ野地区の住民だけではない。淳英会の医療・介護スタッフにとっても、自身の可能性を広げる大きなチャンスとなるに違いない。例えばおゆみの中央病院では、循環器内科に力を入れていくという。「心大血管リハ」という新分野への挑戦に心躍らせているのは、おゆみの診療所リハビリテーション科主任の川村悠（ＰＴ）だ。「心筋梗塞やバイパス手術などの心臓手術後の患者さんは、在宅復帰しても再発するリスクがあります。心臓リハビリは、それを予防するためのもので、有酸素運動中心のリハビリを行います」

おゆみの診療所　佐野大副院長

一〇年先、二〇年先を見通したとき、脳神経外科の創設が大きな意味を持つというのは、おゆみの整形外科クリニックの本田院長だ。「超高齢化社会の進展にともない、脳神経外科の存在と役割はいよいよ高まっていく。当面、当病院で大がかりな手術は行わないものの、市内の基幹病院で手術した患者さんを受け入れ、回復期を蓄積した高度なリハビリノウハウでサポートしたい」

来年三月の開設に向け、建設工事はいよいよ佳境を迎えている。それと競うように、職員が総力を挙げて取り組んでいるのが新病院を担う人材の確保だ。増田事務長は次のようなメッセージを送る。

「有名病院・大病院ではないけれど、専門職としてのキャリアを積んでいくうえでいい条件は整っている。専門性を高めるために、必要とあれば法人負担で大学院に通ってもらったり、海外研修の機会も与えます。特にセラピストにとっては間違いなく魅力的な職場になると思います」

組織や人員の拡充は、これまで表面に出なかった淳英会グループの隠れた一面をのぞかせる。数年前から千葉をホームタウンにしているＪリーグチーム「ジェフユナイテッド市原・千葉」のアカデミークラスとのトレーナー契約を結び、得意分野でもある「スポーツリハ」のノウハウを駆使して、地元チームの勝利に貢献してきた。整形外科・リハビリの延長線にあるスポーツリハにおいても、淳英会は地域において確固たるポジショニングを確立しつつある。

通勤圏のニュータウンで、新病院の開設を契機に構築される統合ヘルスケアネットワーク。急性期から生活期、医療から介護を統合して提供する形が実を結ぼうとしている。 P

医療法人社団淳英会 おゆみの中央病院開設準備室 〒260-0014 千葉市緑区大金沢町364-1 ☎043-300-3140